

釜ヶ崎に生きる人々ー歴史・今・そして未来へー

11V009 川尻 知世

11V014 目黒 葵

はじめに

近年わが国では貧困問題や福祉の問題が深刻化し、生活保護受給者は増加の一途を辿っている。我々は、この貧困問題やそれに伴う福祉課題の現状と解決を探求するため、日本で最大規模の「ドヤ」街地区である、「釜ヶ崎」（あいりん地区）について、これまで文献をもとに先行研究を行ってきた。また、「釜ヶ崎」（あいりん地区）のフィールドワークも行い、「釜ヶ崎」（あいりん地区）の歴史や現状、そして今後この地域が抱えている課題について考察を行なった。本論は、それらをまとめたものである。

第1章 釜ヶ崎（あいりん地区）について

釜ヶ崎（あいりん地区）について述べる前に、まずは「ドヤ街」についての説明を行う。（以後、地区の呼び方は「釜ヶ崎」とする。）

1. ドヤ街について

ドヤ街とは、日本の高度経済成長期時代を支えてきた日雇い労働者達が生活しているまちのことであり、多くの日雇い労働者達が、仕事を求めて全国から訪れ、建築・土木・港湾事業などの日雇い労働に従事して、夜間は寝泊りしている。このような日雇い労働者達が寝泊りする簡易宿泊所のことを、「ドヤ」と呼び、バブル期になると、古めかしい「ドヤ」の多くはビル形式のホテルに建て替えられた。

2. 全国の「ドヤ」街地区について

全国には以下①から⑥に示す主な「ドヤ」街地区があり、その中でも大阪にある大阪市西成区釜ヶ崎地区は、人口が最大であり（2^キ平方メートルに約2万人が生活している）、最も大規模な「ドヤ」街地区である。

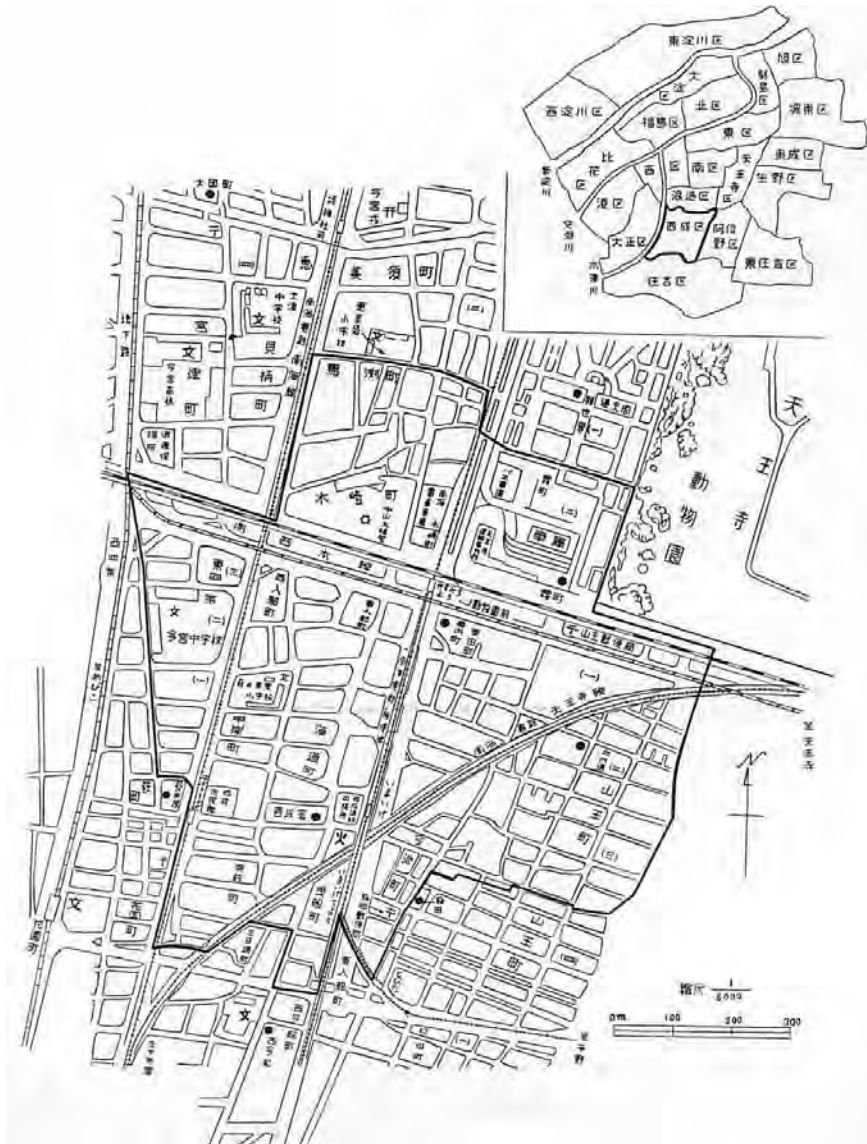
- ①東京都 台東区 山谷
- ②神奈川県 横浜市 寿町
- ③愛知県 名古屋市 笹島
- ④大阪府 大阪市西成区 釜ヶ崎
- ⑤兵庫県 神戸市 新開地
- ⑥福岡県 福岡市 築港

3. 釜ヶ崎について

2.で示した「ドヤ」街地区の一つであり、全国で最も大規模とされる釜ヶ崎とは、④の大阪市西成区北

東部の「ドヤ街」などの簡易宿泊所が集中している地区のことを言う。

図1は、大阪市西成区の位置と西成区の釜ヶ崎地区の地理を示すものである。



<図1：大阪市西成区の位置と大阪市西成区北東部「釜ヶ崎地区」地図>

第2章 釜ヶ崎の歴史の変遷と現状について

本章では、歴史の変遷のもとで釜ヶ崎の理解を深める。

釜ヶ崎は戦後、多くの戦災被害者であふれ、典型的なスラム状態となっていた。

1. 釜ヶ崎の歴史（1960年以降、現在まで）

1960年代の日本は、高度経済成長期であり、さらに大阪万博による「万国博覧会景気」を迎えていた。これにより、建築関係の仕事が多数あったため、全国各地から日雇い労働者達が釜ヶ崎を訪れた。

1970年代から1980年代は、俗に「オイルショック」と言われる「第一次石油危機」が起こり、これによって求人数が大幅に減少したため、釜ヶ崎で大暴動が発生した。その後、「バブル景気」が到来し、全国的に景気が良くなると、日雇い労働者の需要が高まり、釜ヶ崎に活気があふれた。

1990年代に入ると、バブル崩壊や、経済不況期に突入したことにより、求人数が急激に減少し、日雇い労働者達の生活はまたもや苦しいものとなった。1990年代後半になると、多くの支援団体が釜ヶ崎を訪れるようになった。

2000年以降は、ホームレス自立支援法が成立した一方、2008年9月のリーマンショックや2011年3月の東日本大震災も釜ヶ崎に大きな影響を与えている。このころの釜ヶ崎の変化としては、生活保護受給者の増加と、「ドヤ」が「福祉マンション」に建て替えられたことが挙げられる。

<表1 釜ヶ崎の1960年以降の歴史>

年代	社会状況	釜ヶ崎の様子
1960年代	* 高度経済成長期 * 万国博覧会景気	・全国各地より日雇い労働者が釜ヶ崎を訪れる。
1970年代～ 1980年代	* 第一次石油危機 * バブル景気の到来	・大暴動が発生する。 ・日雇い労働者の需要が高まる。
1990年代	* バブル崩壊 * 経済不況期に突入 * 阪神大震災	・バブル崩壊による求人の急激な減少 ・1990年に入り、多くの支援団体が入ってくる。
2000年～現在	* ホームレス自立支援法成立 * リーマンショック * 東日本大震災	・生活保護受給者の増加。 ・ドヤから福祉マンションへ変化

筆者作成

2. 釜ヶ崎のドヤの現状

歴史の変遷に伴い、釜ヶ崎の宿泊師の場であった「ドヤ」も時代とともに大きく変化してきた。現在の釜ヶ崎の宿泊、生活の場であるドヤはどのような状況であるかという点、以下の①から④に分けることができる。

- ①第1章で述べたような「ドヤ」
- ②福祉マンションと「ドヤ」が共存している状態のもの
- ③支援サービスが付いている福祉マンション
- ④外国人向けの低料金ビジネスホテル

以下の写真では①③④を示す。



<写真1：1960年代・1970年代のドヤ>



<写真2：支援サービスが付いている福祉マンション>



<写真3：外国人向けの低料金ビジネスホテル>

3. ホームレス自立支援法について

釜ヶ崎には、2章2で示した宿泊施設や福祉マンションの利用に至るサービス利用に結びつかない人々もまだまだ多く存在し、ホームレス状況の人々が多く存在する。それにより、近年ホームレス支援事業が「ホームレス自立支援法」のもとに実施されている。「ホームレス自立支援法」とは、ホームレスの人々を社会復帰させるために作られた法律である。ただし、あくまでも「自立の意思はあるが、路上生活を余儀なくされたもの」に対する措置法である。「安定した雇用、職業訓練、住居の確保の支援」「職業・生活の相談・支援によるホームレスの防止」「宿泊場所の一時提供、日用品の支給」などを目的としている。しかし、ホームレスが公園などで寝泊りすることによって、適切な利用が妨げられている場合は、管理者が必要な措置を取れることも規定されているため、強制排除の根拠法になりかねないことや、高齢者や障害者への配慮がないことに対しての疑問の声もある。

この法律は、2002年7月31日に成立し、10年間の時限立法であったが、2012年6月20日、参議院本会議で、5年間の延長が決定された。

写真4は路上生活者用の宿泊用シェルター内のものである。(両脇に2段ベッドが並んでおり、数百人が寝泊りできる。)



<写真4：路上生活者用の宿泊用シェルター内>

第3章 釜ヶ崎の抱える今日的課題

1. 釜ヶ崎における5つの課題

釜ヶ崎は、日本最大の日雇い労働者の町である。彼らは、主に肉体労働で日当を稼ぎ、釜ヶ崎で暮らしている。しかし、さまざまな原因から、生活がなりたたなくなる場合がある。また、釜ヶ崎には、生活を困難にする人生の課題を抱えている人々が数多く暮らしている。

ここからは、釜ヶ崎で生活している人々が抱える課題について記していく。

①貧困問題について

釜ヶ崎に生きる人々の抱える問題のひとつに、貧困問題がある。釜ヶ崎は、日雇い労働者の町である。

日本の高度成長期からバブル期には、ビルの建設や万国博、そして関西空港の建設など、日雇い労働者が働く場はたくさんあった。そのため、仕事を求め多くの人々が釜ヶ崎に流入した。しかし、日雇い労働は一日だけの雇用で、安定した収入はない。

また、日雇いの仕事場に住み込みで働く人も多く、その人々は仕事がないと野宿をしながら仕事を待つ。そのため、バブルが崩壊することによって不況になり、日雇いの仕事がなくなると、彼らは、貧困に陥り、住む場所を無くした。そして、住む場所がなければ、仕事が見つからないといった、貧困の悪循環になってしまう。貧困問題は、釜ヶ崎の抱える他の4つの問題の根底に横たわる大きな福祉課題である。

②日雇い労働者の高齢化問題について

現代の日本の社会において、高齢者に対する福祉課題は、全ての人がいずれは高齢者になるという事を考えても、誰もが避けては通れない大きな課題として存在している。

高齢者が生活しやすい町作りをするため、新しいサービスが作られても、それらが人々に認知され、社会に定着をさせていく必要があるため、現代のニーズに見合う町作りを行うには時間がかかる。だが、すぐに結果がでないからといって、あきらめるわけにはいかない。一步一步、少しずつでも、社会の在り方を変えていかなければならない。これは試行錯誤が必要な課題である。

そして、釜ヶ崎の人々にとって、これは輪をかけて大きな課題であるといえる。日雇い労働は、肉体労働であるため、若い者にしか仕事が渡らない。そのため、高齢の日雇い労働者は、仕事を得る事が出来ず、収入がないため、先に述べた貧困に陥る。なおかつ彼らは、貧困に加えて、加齢に伴う体の衰えや疾病や、余生をいかに生きるか、などの課題を抱えて生きなければならない。

ケアの対象であるはずの彼らは、貧困であるがゆえに適切な治療や福祉サービスを受ける事ができずにいるのである。

③新たに釜ヶ崎に流れ着く人々の問題について

釜ヶ崎という場所は、人生のレールから外れてしまった人や、社会の中で生きにくさを抱えている人々の最後の受け皿でもある。DVから逃れてきた人、刑務所から出所したものの、受け入れてくれる家族も社会システムも見つけられなかった人、そして不法滞在の外国人など、様々な過去を持つ人々が、「ここに来ればなんとかなる。」と考え、釜ヶ崎に流れ着いてくる。

しかし、流れ着くものの、釜ヶ崎には彼らに対する根本的な救済の手段がないため、彼らは社会復帰ができない。彼らが社会で生きていける方法を探していく事も、これからの課題である。

④子供たちの抱える問題について

釜ヶ崎で問題を抱えているのは、大人達だけではない。このまちに生きる子供達も多くの問題を抱えている。児童が抱える課題の例として、不就学児の問題がある。お金がないため学校に行けない、または両親が建設現場を転々としている中で生まれ、出生届が出されておらず、戸籍もなかったため、親が学校に通わせられないと思っていた。というケースもある。また、母親が家出していないので、小さい弟や妹の面倒を見るため学校に行く暇がないという子供もいる。さらに、大人たちの行動が子供達の心にも影響を与えていることも問題としてあげられる。釜ヶ崎にはさまざまな事情を抱えた家族が存在し、生活に精一杯で子供の世話まで十分に行うことができない家庭や、DVなどの家庭問題がある家もあるため、子供たちは「自分は、誰からも愛されない」と思い込み、自尊心が育たないという問題である。

また、アルコール中毒の親がいる家庭では、子供は暴力が当たり前なものと感じてしまい、おままごと

の中でも、父親役の子供が母親役の子供に暴力をふるうマネをしたりする。

子供達の自尊心を育てる機会を与える事、そして子供達が未来への希望をもてる地域作りをすることが課題である。

⑤障害者の問題について

釜ヶ崎には、知的障害者や精神障害者が増加している。知的障害、または精神的障害があり、適切なケアが受けられていないと、彼らが社会に適応するのは困難である。彼らに対する偏見から、流れ着いた釜ヶ崎でも、仕事がなく、収入がないという状況に陥る。地域に住む人々の障害者に対する偏見を取り除き、当事者のエンパワメントを図る事が重要である。

2. 釜ヶ崎が抱える様々な問題からの考察

このように、釜ヶ崎の問題を見てみると、あることに気付く。それは、釜ヶ崎の抱える問題は、そのまま日本社会全体の課題としても見る事ができるということである。どのような地域にも、格差問題はあまる。また、高齢化問題や、DV、児童問題、障害者の偏見をなくすことなど、今の日本社会が向き合わなければならない課題が、釜ヶ崎という地域に色濃く存在している。

ここで考えられるのは、釜ヶ崎という地域をより良い地域にするために、私達にもできることがあるのではないかとということである。私たちが自分たちの住む地域に興味をもち、自分たちの住む地域の問題解決のために真摯に取り組めば、自然と社会はよりよくなっていくのではないか。もちろん、釜ヶ崎は釜ヶ崎である。地域には地域の特色があるため、理想だけでは簡単に問題は解決しない。

第4章 釜ヶ崎の現状と未来へ

本章では、よりよい地域を作るために現在の釜ヶ崎では具体的にどのような活動が行われているかを踏まえ、釜ヶ崎という地域のこれからのあり方について考察していく。

1. 釜ヶ崎での支援の現状

さまざまな課題を抱える釜ヶ崎は、将来人々が住みよいまちになるだろうか。そのことを考えるには、現在どのような支援が行われているかを踏まえて考える必要がある。これから、現在釜ヶ崎の住民に行われている支援の手を記しながら、この先どのような地域づくりが必要かを考察していく。

①住民の自主性を育てる支援

釜ヶ崎には、釜ヶ崎住人の労働の提供の場として「あいりんセンター」が設置されている。ここでは、手配師と呼ばれる人々が毎朝やって来て、労働者を選別し、労働者は彼らからその日の仕事をもらう。しかし、今は仕事が少なく、労働にあぶれる人がほとんどである。しかし、あいりんセンターには仕事にあぶれた人々に対し、「アブレ手当」を支給する窓口がある。アブレ手当をもらうには手続きが必要で、一か月にもらえる回数も決まっている。また、仕事にあぶれた人全員がアブレ手当を貰えるわけではない。

住民が安心して暮らせる地域づくりをするためには、一人ひとりが経済的、または精神的に自立することが必要である。仕事をして社会貢献をしているという自覚が、人にとってひとつの自信になる。しかし、仕事をしていることのみが、自立の条件だろうか。その人が、責任を持ちながらも肩の力を抜いてそ



<写真5：日雇いの仕事を求めて集まる人々>

の人らしく生きていくことが、自己実現につながる。その自己実現が、自立である。と考えられる。

今、仕事を得られない日雇い労働者や、低所得者が釜ヶ崎に多いが、その地域に暮らす人々が自分らしく生きていけるように、支援をする必要がある。あいりんセンターでのアプレ手当などの、支援体制や支援のあり方を検討し、実現しなければならないと考える。

住民の一人ひとりが真の意味で自立できれば、そこに自主性が生まれ、ただ支援を受けるだけではなく、いかに支援を活用するかが考えられるようになる。

②心身の健康を支える支援

釜ヶ崎には無料低額診療事業を行っている大阪社会医療センター附属病院が設置されている。この無料低額診療事業の制度は、保険に入っていない人、または社会的・経済的な理由によって適切な医療を受けることができない日雇い労働者や高齢者に対し、無料または低額で診察を行うものである。また、この制度は国籍を問わず、また入管法の適法・不適法の別なく適用されるなど、医療的なケアが必要な人にケアを行き渡らせるためのものである。

この大阪社会医療センター附属病院は、治療費を利用者との信頼関係において金銭的余裕ができるまで貸しておくという病院独自の貸付制度を行っており、医療を必要とする人々に対してすばやく対応している。



<写真6：大阪社会医療センター附属病院>

大阪社会医療センター附属病院のような障害者や病気を抱える人々への保健医療と福祉サービスの充足が必要である。釜ヶ崎の結核の罹患率は世界で上位でもある。体が健康でなければ、日雇いの仕事を得る事はできない。体調を崩し、仕事を得られないとケアを受けられなくなる。という悪循環も起こりがちである。そんな人々のために、無料低額診療事業はある。そして、体の健康に加え、精神的な健康を作る支援も必要である。賭博ではない楽しみを持つことや、心から笑える環境作りを行うことが、町の活気につながると思う。

③子供たちの健全育成を図る支援

釜ヶ崎の中心にある「わかき保育園」では、子供達に「自分自身が大切にされている」と経験してもらうことを大切にしている。保育園に来ていなくても「子供の置かれている状況によって保育をする」ための「あおぞら保育」が開かれている。また、同園では子供達の気持ちを尊重するために自由保育という形態をとり、一人ひとりの思いに向き合うことを心掛けている。

釜ヶ崎に生きる子供達は、この地域に生きているからこそ、他人を思いやり、困難を抱えている人に寄り添い、助け合う事の大切さを学ぶことが可能である。このような子供たちの健全育成を目指した保育、そして教育機関、サービスの充実が必要とされていると考える。

④人と人との交流を図る支援

釜ヶ崎の人々の交流の場としての「ふるさとの家」は、人々の憩いの場所としても開放されている。キリスト教の神父が主体となって活動しており、施設自体は教会ではないが、ミサも行われている。自分に居場所があるということは、誰にとっても救いである。どんな過去があっても、どんな人にも開かれているのが、「ふるさとの家」である。



<写真7：ふるさとの家の外観>

貧困層の人、高齢者、障害者、ホームレスなど、どんな人間でも受け入れてきた釜ヶ崎であるからこそ、そこに生きる人々は、優しさやしたたかさ、命の大切さに気づき、その心を育める可能性を秘めている。釜ヶ崎という地域全体が、ひとつのホームになれば、ホームレスという名前はなくなるのではないか。

2. 釜ヶ崎の未来について

釜ヶ崎の人々に対する課題と支援については貧困に陥った人や高齢者、そして障害者が自己実現をはかること、子供が未来に希望を持ち、心身ともに健全に成長していくことなどであり、今釜ヶ崎に求められていることは、個人の自己実現、そして釜ヶ崎というまちの自立に集約されると考えられる。

「自立とは、全て自己責任だから」と、個人に全て背負わせるのではなく、困っている人に手を差し伸べ、そして時々自分も助けてもらう、という助け合い、支えあいの精神で、個人と環境との調和を目指すことが、個人の自己実現につながり、自主性をもった人々の住むまちが、自立したまちと言えると思う。

おわりに

今、釜ヶ崎に住む人々の多くは自分に誇りを持っていないと考える。なぜなら、野宿者がたくさん存在し、病気や障害を持つ人々が多く存在し、他の地域の人々からは偏見の目で見られている状態に置かれているからである。しかし、少しずつでも彼らが尊厳を保ちながら彼らしく生きていけるように、行政やボランティア、保健医療・福祉・教育機関そして、釜ヶ崎に住む人たちの協働で、釜ヶ崎らしい地域づくりをしていく必要がある。

結論として、釜ヶ崎に住む人々は、今、たくさんの問題を抱えながらも、行政や福祉機関の支援をうけて彼らなりに生活している。しかし、彼らはただ助けてもらう可哀想な人ではなく、互いに助け合い、元気を出し合って生きている。家がなくても互いに助け合って生きているホームレスを汚い、臭いなどといって襲撃する若者たちがいるが、その若者たちには家があっても心が無い。まさに、心のホームがない人なのではないか。そのような人々が今の社会には数多く存在するのではないだろうか。

私たちは、釜ヶ崎の諸問題を見つめながら、現代の様々な社会問題や社会福祉課題に向き合い、より良い社会を作っていかなければならない。

つまり、一つひとつの地域が、そこに住んでいる人たちにとってのホームであると言えるような、温かく活気のある場所を創るということである。

<参考文献>

- * 「釜ヶ崎のススメ」・原口剛、稲田七海、白波瀬達也、平川隆啓編著・洛北出版・2011
- * 「釜ヶ崎の真ん中にある保育所でさまざまな事情を抱える親と子への支援」・蕨川晴之・総合社会福祉研究所『福祉のひろば』2012-5
- * 「多様性」の中で育つことの素晴らしさ—こどもの里のこどもたち—・荘保共子・総合社会福祉研究所『福祉のひろば』2012-5
- * 「ホームレス自立支援法と野宿者の人権」・笹沼弘志・<http://www.jca.apc.org>
- * 「釜ヶ崎の現場から」・岩田秀一・朝日ジャーナル連載・1973.6.22～1973.7.20
- * 「あいりん地区（釜ヶ崎）日雇い労働者の高齢化と生活問題」・庄屋怜子・大阪府立大学社会福祉学部 社会問題研究・1988, 38(1), p.21-61
- * 「ホームレス自立支援法」・<http://kotobank.jp>

* 「ホームレス」の生活実態 by Naoko Fujita

現代ホームレス事情—大阪西成・あいりん地区に暮らす人々を見つめて—・西本裕隆著・鹿砦社・2010

(指導教員 安井豊子)